
空気色の私 エピソード 0 《ゼロ》

青空鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空気色の私 エピソード 0 《ゼロ》

【Nコード】

N2268Y

【作者名】

青空鴉

【あらすじ】

空気色の私という前に書いた短編小説から産まれた、なぜ空気色の私というようになったのかを物語った物語です。

一人の少女の13年間を簡単に紹介しているエッセイみたいな物語です。

(前書き)

空気色の私の過去を振り返ってみるとそこには自分が思い描いたさまざまな花が咲いていた。

なんてかっこつけてみましたが、ひとまず今回も「なにいつてるの？」という点もたくさんあるでしょうが、多めに見て呼んでいただけるとうれしいです！

みんなは空気って普段意識している？

してないよね。だって空気は認識するなんていうことはしないものね。普通にすってはいてを意識せずに繰り返して生きているもん存在もみんな普段は忘れちゃってるんじゃないかな？。

私は空気と一緒になんだ。

空気色なんだよ。おかしいかな？

私は13歳で白血病というもので人生を終えたんだ。

え？どんな人生だったのって？

きつとつまらないと思うよ。私の話。だって空気だから。

あ！でも、産まれたときからなんてことはないよ。誰だって人は成長しながら性格が決まっていくなからね。でも環境も影響するってどこかの科学者さんが言ってたなあ。

うーん・・・やっぱり話すことにするね。私ってさびしがりやだから。

それにせつかく聞いてくれたしね。

私の生まれたときはね

目がくりくりしている可愛い赤ちゃんだったんだって。

そのころは私・・・空気じゃなかったのかもね

それから成長していった・・・私が2歳のとき妹が生まれた。

髪の毛が赤ちゃんなのにふさふさでほっぺたが赤くてよく笑う子だったんだって。

・・・あれ？ここでもう私って空気なのかなあ？

妹と私では写真の量も親からの血の量もきつと大体同じなのに印象が違う。

・・・まさかね。

私は保育園にいったんだ。

評価はいつも よくできました

友達もいた。いつもキャツキャツ！笑ってままごとをしたり追いかけてっこをしたり。

でも一人で夕焼けを見た記憶が一番残ってるかな。

さびしいなんて思わなかった。ただ夕焼けがきれいだったんだ。

小学校に入ったよ。

地元の普通の小学校。桜の大木が目印だったな。

友達もできた。私はどちらかといえはもう静かな子だったな。

妹がいるということと姉としての責任感も増えたしなによりもう母は妹のほうが好きだったみたいだから。

私は成長するにつれて人とはあまり関わらなくなっただ。

朝は早く来て自分の好きな本を読む。本を読むのが一応趣味だしね。

授業中はプリントは熱心にするけど手は決して上げない。指名されたり、先生が日付を見て「うん」と。今日は6月の17日だから・・・佐藤さん」なんてこともあったけど。そのときは極力早く大声じゃないくらいの大きさの声で「です」という。けっして先生とは目を合わせなかったし、目立つことを避けるようになったんだ。どうしてかなあ？そこらへんはあんまり詳しくというか・・・はつきりとした理由はないな。ただ目立つのが恥ずかしかったのかも。目立つとなんだか体が熱くなるし。みんなの視線が突き刺さる。

今私に注目されてるなんて思うだけでぞ

つとしちゃうよ！

休み時間は図書室に入り浸る。好きな本でも何でも図書室の本を読みあさる。

そうしているうちに卒業までに図書室の本は全部読みきってしまったんだよ。少し私の自慢でもあるんだ、このことがね。

放課後は友達とも遊ぶことはあつたけど、ほとんどは習い事が邪魔をしたかな。邪魔って言い方もないね。重なっちゃったんだ。でも習い事は嫌いではなかったし将来のことも言われて習い事を優先していたなあ。

そしたら

友達から誘われることがなくなったの。

きつとこの時だと思うな。

私が空気になった瞬間って。

けっしていじめなどとは認識していなかったよ。でも認識することを考えないだけだったかもしれないし、周りの人に本当に認識されていなくてもよかったのかもしれない。でもそんなことどっちでもいいよね。

隣に私がいてあきらかに答えを知っているのがわかっていても、隣の席の人はわざわざ離れた人に答えを聞く。

発言をしたりテストで百点を取ったとしても、周りがざわつくこともなく、無言で目がうなづく。

休み時間本を読んでも誰にも「なに読んでいるの？」なんて聞かれることはめつたにない。

みんなからは親しい人までも「さん付け」

給食時間は会話することもなく、ひたすら口を動かす。そのおかげかはわからないけど、太りはしなかったよ。

体育の時間は二人一組なんていう地獄はないよ。仲のいい子は別の組だったから組めないし。だからいつも「組んでない人」で立っている自分があるんだ。

.....

でもこうしてみると。私ってやっぱりさびしかったんだろっなあ。どんなに認識されていないって自分で言っただって認識されたかった。

何の本読んでるの？って聞かれて心臓がたとえばはじけても答えなかった。

今日は何があるかな？って空を見ながら登校中期待していた
そんな自分がいたんだ。

そんなこと、生きている私はわからなかったから空気色の私というあだ名をつけて無言のSOSを出していたんだ。

そんなときだね。

白血病がわかったのは

それから本当につらい毎日だった。

薬ももちろんつらかったけど、看護師さんはいい人だったけど、家族も毎日来てくれたけど

誰一人友達は来なかった。

親しい友達だって学校に2、3人はいたけど。

きつと来れないんだ。いそがしから。都合が合わないから。そもそも面会は家族以外許されないのかも知れないな。

なんて言い訳して、本当はクラスみんなの寄せ書きとかドキュメントリーを創造しちゃったりしてたな。

それからの私は窓から空を見上げることが日課になったんだ。

そして私は人生を見返しながら

本当は自分はさびしかっただけなんだなって思いながらあの世に旅立っていったんだ。

.....

どう？つまらなかつたよね？

そんなことない？

そう？うれしいな。こうして聞いてくれる人がいるだけでも笑顔
ができるよ。

生きてる間に私もこうやって人に話しを聞いてもらいたかった
なあ。

もっと素直になればよかったなあ。

でも世界って私みたいなちっぽけな存在が集まって固まってなっ
てるんだって思うと少し笑っちゃうね。

だって

私みたいにいるんな人が悩んで生きてるんだもん
それぞれの考えがあってそれぞれの性格があって
人ってできてるんだよね。

だから

今を大切にいていこうってことじゃないかな？

それを今度はちゃんと守ろうと思うんだ

だから今はあの世でゆっくりしてるよ。

たまにおばあちゃんに会ったりして笑顔で挨拶するけど

ほかは何も考えずにあの世でゆっくりしてる

いつか私がもう一度神様からチャンスをもたらえるのを待ち望んで
・
・
ね

(後書き)

読んでいただきありがとうございます！

ほんの少しでも感想などがいただけたらうれしいです！

本当にありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2268y/>

空気色の私 エピソード 0 《ゼロ》

2011年11月5日00時03分発行